

# 『黄帝内经』 解題

真柳 誠

茨城大学

『黄帝内经』(こうていだいけい)は紀元前1世紀の中国医書で、通説では現存する『素問』と『靈枢』がこれに該当するという。それゆえ両書に『黄帝内经素問』『黄帝内经灵枢』の書名が後世あたえられて以来、中国最古の医学古典とされてきた。2011年にはユネスコによる「世界の記憶(遺産)」に『黄帝内经』が選定され、実際は『素問』最古版の金版が対象とされている。しかし近年、出土物からしても当通説は否定されるようになった。そこで、こうした「黄帝内经伝説」がうまれた経緯に加え、『素問』と『靈枢』の概要と版本を、拙著<sup>1)</sup>などから略説したい。

## 黄帝内经伝説

前漢政府の蔵書目録『七略』(紀元前6年ころ)に医療関連の方技略があり、著録書は侍医の李柱国が宮中の文献を整理し、書名をあたえたとされる。『七略』は亡佚したが、正史の『漢書』(紀元後78年ころ)芸文志(図書目録)に引用されて伝わる。ここに著録の医書名は後代の目録にひとつとしてみえないので、おそくとも梁の目録『七録』(523年)以前には亡佚していただろう。ただし芸文志・方技の医経部分冒頭(図1)にみえる「黄帝内经十八卷」だけは、『素問』9巻と『針経』9巻(現『靈枢』の祖本)にわかれて伝承された、との巻数による類推が『甲乙経』序(4世紀後半)からはじまる。

ところで、『漢書』芸文志が幾巻と著録したのは卷子本で、厚1-3mm・幅1cmほどの竹簡や木簡をすだれ状に編み、ふつつ1片に1行を書写していた。このため4世紀から一般化した紙の卷子本とは1巻に記述できる行数が大きく違う。出土した竹・木簡本は1巻が数十~数百片(行)ほどだ

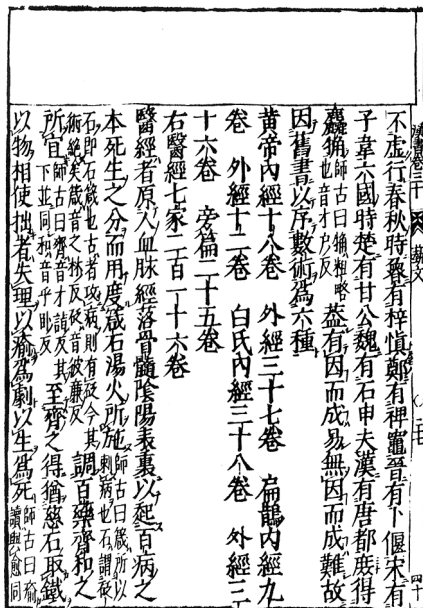


図1 『漢書』芸文志(『和刻本正史』, 東京・汲古書院影印, 1972)

が、現存する紙の古卷子本は1巻が数百~千数百行ほど。したがって竹・木簡本の『黄帝内经』18巻が紙本になるなら数巻前後なのに、それが紙本の『素問』9巻+『針経』9巻というのはこじつけでしかない。

とするなら、『漢書』芸文志の「黄帝内经十八巻・外経三十七巻, 扁鵲内経九巻・外経十二巻, ……」の各書と、『素問』『靈枢』との関連性こそ想定しなければならない。というのも『史記』倉公伝によると、前2世紀の名医・淳于意は「黄帝・扁鵲之脈書」を師から伝授されていた。前1世紀の埋葬らしい四川天回3号墓から近年出土した医書には「敝昔曰……」という記述があり、敝昔は扁鵲のことらしい。さらに天回医書の一部は、現在の『史記』倉公伝や『素問』『靈枢』などの字句

と合致する<sup>2)</sup>。すると前2世紀からの黄帝流や扁鵲流などの医書が整理され、『漢書』芸文志の各書となった。それら素材を「黄帝と臣下」の問答などに改変し、前漢末～後漢中期に『針經』の祖本が著述され、同時に古文献から編纂されたのが『素問』の祖本だという<sup>3)</sup>。現段階で最も有力な推定と思われる。

後漢末期の3世紀初～前期、『傷寒論』の祖本たる張仲景の医書が編述された。その序に「撰用素問・九卷……」とあるので、当時の書名は「針經」でなく「九卷」だった。3世紀中期の『脈經』は「素問」「九卷」を引用、4世紀後半の『甲乙經』は「素問」「九卷」と針灸孔穴書の「明堂」を引用する。南北朝の全元起は500年ころ訓解本の『黄帝素問』8巻を編纂し、書名に初めて黄帝を冠した。のち『隋書』経籍志は「黄帝素問九卷」と「黄帝針經九卷」を著録する。唐・永徽2年(651)の医疾令は、針医官の育成教材に両書を必修とした。ともに書名に「黄帝」を冠し、「九卷」を「針經」に改称したのは、国家テキストとしての権威づけだったと思われる。

唐・高宗の太子に侍従した学官の楊上善は、「素問」「九卷」を内容別に類編・加注した『黄帝内經太素』30巻と、孔穴を経脈別に配列・加注した『黄帝内經明堂』13巻を編纂し、675年に奏上した。両書で初めて「黄帝内經」を冠したのは、楊上善が『甲乙經』序にしたがいが、『漢書』芸文志の「黄帝内經」を復原しようとしたからだった。楊上善の両書は唐宋間の戦乱ではほぼ散佚したが、日本には吉備真備が将来して医官育成の教材とされ、今も残欠本が現存する(図2)。

中唐の762年、王冰は全元起本を再編して全文に加注した『黄帝素問』24巻を著し、注文に「針經」の条文を「靈樞經」として引用した。そう称したのは王冰が道家だったかららしい。王冰序も『漢書』芸文志の「黄帝内經」18巻は「素問」9巻と「靈樞」9巻だとし、「素問」に欠けた巻7を先師の秘本で増入した(図3)という。この増入部分は運氣論による特異な七篇からなり、運氣七篇とよばれる。ただし実際は五代～北宋初期の道士が運氣篇の経文を作成、つぎに王冰の注文を偽作、

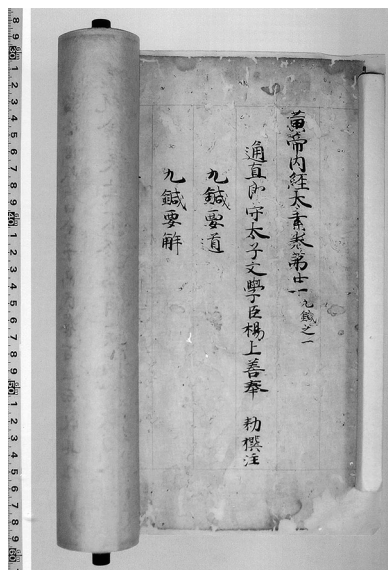


図2 『黄帝内經太素』巻21(武田科学振興財団蔵, 重文)

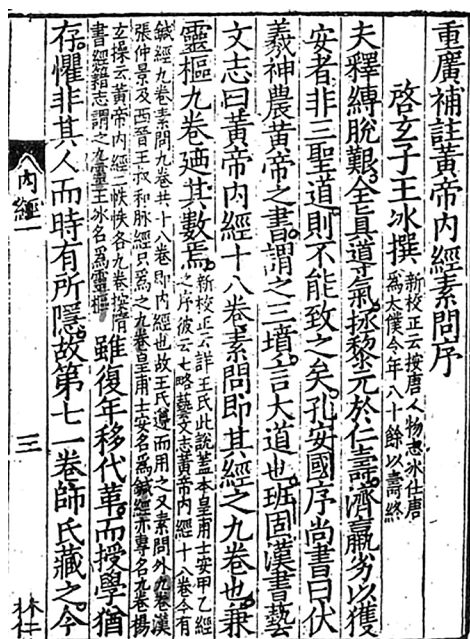


図3 明・顧從徳本『素問』(台北・国立中国医薬研究所影印, 1979)

北宋初期に王冰序も改変して王注『素問』に増入されたらしい<sup>4)</sup>。

こうした古典医書の刊行は北宋時代からで、政府版は医官育成教材の校定・統一が主目的だった。『素問』の北宋政府初版は王冰注本に基づく

1026年の天聖本だが、実態をうかがえる伝本や記録がない。第2版は政府の校正医書局が天聖本を大規模に補註し、1069年に校刊した『補註黄帝内経素問』24巻（熙寧本）だった。これで「黄帝内経」を冠した『素問』が出現し、『甲乙経』序や王冰序の伝説が通説となる一振りがあたえられた。しかし伝説の一方の『黄帝針経』は北宋に残欠の1巻本しか伝存せず、刊行できなかった。なお唐の医制を導入した新羅には完本がもたらされており、その伝写本を高麗が北宋に献本、1093年に『黄帝針経』9巻（元祐本）が初刊行された。

のち金に北方を占有された南宋は紹興年間まで校定の力量がなく、北宋版をそのまま覆刻（かぶせ彫り）している。そして紹興25年（1155）、両書は「黄帝内経」の総称で初めて合刻（紹興本）された。ただし金と対峙していた政情もあり、東夷の高麗本による元祐本『黄帝針経』9巻そのままでは再版できない。そこで書名を王冰説により『新刊黄帝内経霊枢』に改変、巻数も熙寧本『素問』に合わせて24巻に分けた。熙寧本『素問』の覆刻では、書名のみ『霊枢』の増補をいう「重広」を冠した『重広補註黄帝内経素問』に改称した。この合刻により仮称の「黄帝内経」が出現し、4世紀後半以来の伝説が現実化された。以後は千年弱、『漢書』芸文志の「黄帝内経」≒現在の『素問』+『霊枢』が通説とされてきた。しかし近年の出土文献の知見から、通説の「黄帝内経伝説」は虚構で不正確、と論断されたのである。

### 『素問』について

**【概要】** 本書の前身は、先秦からの医学知識と記録を集大成した『漢書』芸文志の「黄帝内経・外経、扁鵲内経・外経、白氏内経・外経、旁篇」などだったらしい。これら基礎文献群からの取捨選択と整理・補足をへて、後漢中期までに『素問』の書名と原内容が成立、幾多の変遷をへて現在まで伝承されてきた。

当然、本書は一人一代の作ではなく、内容や表現には秦代をさかのぼるもの、漢代のもの、あるいは漢以降と推定されるものが現伝本に混在している。同一篇内ですら、ことなる発展段階の論説

が併記される場合もある。たびかさなる校定や出版で字句にも複雑な変化が生じており、解釈と利用には十分な注意をはらわねばならない。

現在の『素問』は79篇からなり、多くは伝説上の人物、黄帝と臣下の岐伯・雷公・鬼臾区との問答に仮託する形式で編述されている。内容は各篇によりまちまちだが、おもに陰陽五行説と天地人の三才説を基本論理に臟腑や経脈などの概念も応用し、生理・病理・病因・診断・薬理・治療・養生など基礎医学全般、また孔穴と灸・針石・九針・薬などによる各種治療法を論述する。第66-71・74篇では運氣論を展開し、年・季節ごとの気候変化とその影響による疾病の発生傾向、および治療法をのべている。

本書は中国伝統医学における最重要古典のひとつであり、後世にあたえた影響ははかりしれない。とりわけ北宋時代に校定・刊行されて以降、多くの医家により書中の医論が実践に応用され、発展し、それが現代にいたるまで中国および周縁国における伝統医学の根幹をなしている。注釈書や研究書もすくなくない。日本では江戸時代の古方派が本書などの黄帝医籍、およびそれらに由来する説を排撃した。このため後世は針灸医学の古典としてのみ重視され、漢方家には等閑視される傾向もある。だが中国医学の成立と発展、そして日本ほか周縁国の医学史をみわたす上でも本書の研究を欠くことはできない。

**【版本】** 古い『素問』は4世紀後半の『甲乙経』に引用されているが、『甲乙経』は唐代までの古写本が伝存しない。北宋版も散佚し、現存するのは明清の翻刻版や写本のみで信頼性が低い。唐代までの『素問』は敦煌から断簡が出土しているが、ほんの一部にすぎない。ただし前述の楊上善『黄帝内経太素』には唐代の『素問』と『九卷』が引用され、ほぼ原本のまま日本に伝来して仁和寺ほかに現存するので、その学術価値はきわめて高い。

『素問』の北宋版や南宋版は一本も現存しない。しかし北宋の熙寧本を南宋の紹興本が覆刻し、その紹興本を影刻した明の顧從徳本が30点ほど現存する。この顧本が最善本といえ、影印本も中国・日本・台湾（図4）から出版されている。



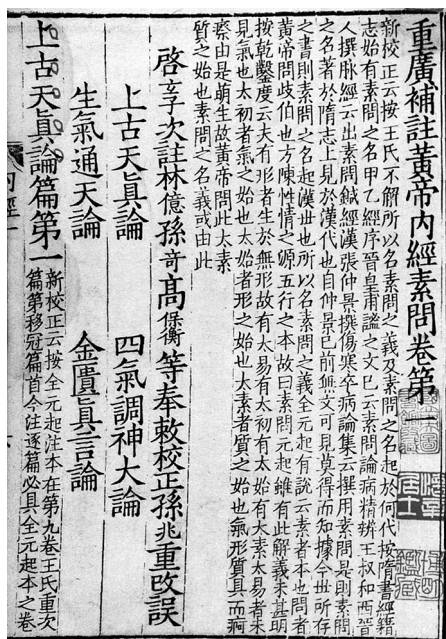


図4 明・顧從徳本『素問』(台北・国立中国医薬研究所影印, 1979)

現存最古版はユネスコ「世界の記憶(遺産)」に選定されている金版(中国国家図書館蔵)だが、妄改が多くてテキストに適さない。金版には偽撰の『素問亡篇』も附刻されている。

北宋では校正医書局の孫兆が熙寧本を再校正した『補註釈文黄帝内経素問』24巻を、1085年ころに家刻(元豊本)していた。この元豊本にもとづく福建版も南宋中後期にあったが、みな散佚している。ただし福建版を元の読書堂が1283年に覆刻し、さらに読書堂版を明の嘉靖年間に修補・重印した書が北京の中国国家図書館に唯一現存する。これは元豊本の旧をかなり正確に保存しており、顧本とならぶ重要版といえよう。読書堂本にも『亡篇』が附刻され、2006年には『中華再造善本』(北京図書館出版社)に影印収録された。

北宋末期には医官育成制度が拡充され、そのテキストの筆頭が『素問』だった。このため北宋最後の政府校定がなされ、1121年前後に宣和本24巻が刊行された。原題は「補註釈文黄帝内経素問」で、巻頭・巻末題は「黄帝内経素問」だったらしい。南宋になると宣和本が坊刻再版されたが、この南宋坊刻本も宣和本も現存しない。しかし南宋

坊刻本をかなり丁寧に筆写した室町古鈔本が宮内庁書陵部に現存するので、その旧態をうかがうことができる。室町古鈔本も影印(オリент出版社, 1992)されているので、今後は顧本や読書堂本の対校に利用すべきだろう。

ほかに元版や明清版・和刻版もあるが、上掲版をこえる価値はないので贅言しない。

## 『靈枢』について

【概要】 本書81篇は『素問』と同様に黄帝と臣下の問答形式を主体に論述され、のち書名にも「黄帝」が冠せられた。ただし臣下は『素問』の雷公・岐伯らのほかに、伯高・少俞・少師が増加している。内容も『素問』と同傾向だが、経脈の走向や病証・五行説・望診法など、個々の論述では『素問』より伸展した内容がみえる。『素問』の針法はおもに瀉血だが、『靈枢』は微針による気の調節を強調する。『素問』の脈診法は「寸口診」「三部九候診」「人迎脈口診」などが並存するが、『靈枢』は「人迎脈口診」で統一される、などの相異もすくなくない。本書はとくに針灸の臨床に関連する分野に重点があり、その根幹たる12経脈説を確立した古典といえる。

【伝承史と版本】 本書は後漢中期の撰述当初から9巻本だったようで、3世紀初には『九巻』とよばれていた。のち『針経』、隋唐代から『黄帝針経』と改称され、医疾令で針生の必習書・考試書とされ、奈良時代や新羅時代の律令制度でも採用された。しかし唐宋間の戦乱で伝承がとだえ、北宋初期には1巻本しかなかった。唐令を部分的に踏襲した北宋初期の天聖令で針学の必習書とされたものの、考試の規定書にはなかった。

北宋後期の元祐年間、高麗派遣から帰国した王欽臣が秘書省の副長官となった。おそらくかれの提案で政府にない亡佚書の『所求書目録』を作成し、1091年に高麗使節へわたしている。そのなかに「黄帝針経九巻」が記載されていた。翌1092年11月、高麗国進奉使が多数の宋亡佚書を将来し、秘書省が同年12月から謄写校正していた。翌1093年1月、秘書省長官の任にあった王欽臣は、高麗将来本で唯一完本だったらしい『黄帝針経』の刊

行を上進，詔勅により秘書省で校対・詳定し，尚書工部で彫板，国子監から印刷施行された。現『靈樞』の一部経文下にある「一作」などの割注は，秘書省による校対結果らしい。むろん政府刊行物ゆえ，王欽臣の序跋や秘書省・国子監の列銜・牒文，毎巻頭の銜名も付加されただろう。しかし経文まで改変するいわゆる「校正」はおよそなされなかったらしい。これが元祐本『針経』9巻である。

元祐本は北宋で重印されなかったためか，南宋初期の政府蔵書には『黄帝針経』がなかった。他方，現『靈樞』の史崧序からすると，かれが家蔵の『靈樞』9巻を24巻に改編して南宋政府に献上し，1155年に国子監から刊行されたことになる。ただし，この直後から目録書に「黄帝針経九巻」が著録されるので，史崧が献上したのは元祐本系『黄帝針経』9巻に相違ない。史崧が『針経』を献上すると書けなかったゆえんもあった。かれの序が言及する名医，すなわち高宗の侍医・王繼先らが王冰序の「黄帝内经」を再現するため，『素問』24巻と合刻する『針経』9巻を『靈樞』24巻に改名・改編したからである。

当時の南宋は王繼先と義兄弟だった宰相の秦檜が金と「紹興和議」をむすび，左遷された和議反対者には「華夷思想」が抬頭していた。この状況下の出版では，『靈樞』が東夷の将来本に由来する証拠一切を隠蔽しなければならない。繼先らは当理由で書名・巻数の改変のみならず，元祐本が底本とわかる王欽臣の序跋や北宋の列銜・牒文，毎巻頭の銜名を削除したらしい。同時に書頭に24巻の総目を付加し，毎巻頭にあったはずの篇目まで削除した。ゆえに現『靈樞』はすべて毎巻頭の書題以下に編者名や篇目がなく，各篇名と経文の記載が直接はじまる（図5）。この書式は他の中国古典に類例がなく，図2や図4と比較しても異様というしかない。

しかも王繼先が1161年に弾劾・追放されたため，のち紹興本の重印や再版では繼先らの序跋・列銜などが削除された。さらに南宋の蔵書目は紹興本自体を黙殺し，刊行に政府機関が関与した記録も抹消した。これゆえ紹興本の存在と実態が闇

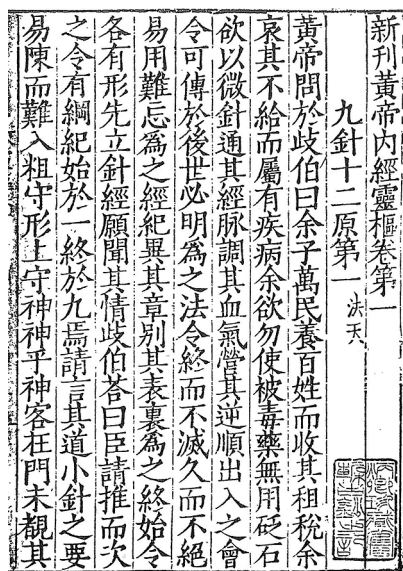


図5 明・無名氏本『靈樞』（東京・日本経絡学会影印，1992）

にかくれ，今日まで『靈樞』の来歴に混乱と誤解がつついてきたのである。

現『靈樞』の諸本が紹興本を祖とするのはうたがいない。現存最古版は元の古林書堂本で，24巻を12巻に再編し，巻末の音釈を篇末に移動している。明代には古林本にもとづく諸本が出版され，それらが現中国でもテキストとされている。日本では江戸前中期に『類経』から再編された9巻本も流行した。幕末には『経籍訪古志』が明・無名氏の仿宋24巻本を最善本として著録し，当本は1987年以来，幾度か影印出版（図5）されている。

古林本と無名氏本の比較・検討により，両本は親子関係にない一方，元版でしかありえない共通の特徴を見いだされた。つまり両本は兄弟関係にあり，ともに紹興本系未詳元版（おそらく読書堂本）の翻刻だった。また明の嘉靖後期に仿宋をよそおい刻版されたのが無名氏本だった。とはいえ無名氏本の俗字・誤字は古林本よりすくなく，善本性がたかい。

以上の検討で，現『靈樞』は明・無名氏本→未詳元版→南宋紹興本→北宋元祐本→高麗・新羅本→唐政府本まで，ほぼ直線的にさかのぼる歴史があることを解明できた。この千数百年の伝承において，『素問』と同様に北宋の政争と金軍による

戦乱、さらに南宋の政争による影響を三重にこうむっていた。もし高麗将来本・王欽臣・史崧・王継先および元明版の行為ひとつでも欠落するならば、まちがいなく本書は亡佚していた。奇跡的とはこのことだろう。そして現存本と『素問』校刊との関連、また史書・目録書等からやっとな上の伝承史を解明できたのである。

すなわち祖本の唐政府本は初唐の七世紀中期に校定され、それが民間の伝写による内容改変をおよそ経由せず、現代まで伝承されてきた。むろん唐政府や歴代の各本でもいささか「校定」され、文脈の変化や訛字もかならず生じている。しかしながら『素問』『傷寒論』などよりはるかに軽微で、唐代あるいは唐以前の旧態をかなり保持するだろうと推測できる。希有なことだが、『靈枢』の貴重な特徴といわねばならない。

本書が中国と周囲の各国にあたえてきた影響は『素問』と同様におおきい。しかし『素問』にくらべ、本書の研究はまだ不十分というのが現状であろう。とくに昭和以降の日本では針灸面からの研究が主体だった。今後はより正確な資料にもとづき、東アジア伝統医学の基礎医学書としても研究されねばならない。

## 文献

- 1) 真柳誠. 黄帝医籍研究. 東京: 汲古書院; 2014
- 2) 柳長華ほか. 四川成都天回漢墓医簡の命名与學術源流考. 文物 2017(12): 58-69
- 3) 黄龍祥. 《針經》《素問》編撰与流伝解謎. 中華医史雜誌 2020; 50(2): 13-20
- 4) 山田慶兒. 氣の自然像. 東京: 岩波書店; 2002. p. 1-25